北大路魯山人

［上巻］

白崎秀雄

Hideo Shirasaki

中公文庫

中公文庫

北大路魯山人（上）

定価はカバーに表示してあります。

1997年1月6日印刷
1997年1月18日発行

著　者　白崎秀雄

発行者　嶋中鵬二

発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋2-8-7　振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Yumi Shirasaki

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-202779-9　C1123　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

北大路魯山人

上　巻

白崎秀雄

中央公論社

北大路魯山人　上卷　目　次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章
一、一太上京　9
二、美食倶楽部料理　28
三、嗜虐の快　46
四、プリズム神経　82
五、なぜ今、魯山人　97
第二章
一、烙印を額に　125
二、虹　141
三、南鞘町学園　163
四、変幻　184

五、「技巧は芸術ならず」　207
六、檀那　清兵衛　228
七、北陸漂泊行　252
八、雲に乗る　306

第三章

一、料理芸術論　321
二、学んで超えた　345
三、パリサイ人　382
四、鼠の末裔　415
五、兇の星　440
六、我のみ尊し　466

北大路魯山人　上巻

第一章

一、一太上京

大正九年十一月半ばすぎの某日、宵。

東京京橋東仲通り、「大雅堂美術店」の一階六畳間で、一人の少年が端近(はしちか)に膝をそろえていた。

板床のところに、ホームスパン地の洋服にノーネクタイの、大きな身体の「先生」が、さかんにビールを呷り、料理を口に運んでいる。となりでめくら縞の着物の「旦那さん」がビールを注ぎ、他に馴染客も三、四人「先生」をかこむようにして、賑かに飲み食いしている。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

鼻下髭の「先生」は、肉付きゆたかな頬を桜いろにして、大声で美術のこと料理のこと、あるいは人物月旦を談じていたが、

「おい、よう来たな、よう来た。お前名前は一太だったな」

と、鼈甲ぶち眼鏡の部厚いレンズの奥から少年を見すえて、いいかけて来た。一分刈の青い頭を、折るように下げて、少年は「先生」にそのとき驚づかみにされたような思いがした。

「吾輩にわからんことはないぞ、どうだ一公吾輩に答えられないようなことを一つきいてみろ」

先生は、酔いの廻った調子でいう。一同が笑う。

そのうちに、「先生」は、

「とにかく一太、お前はこれから全部俺に任しとくんだ、いいか。わかったら一服してな、調理場で皿を洗え」

と、事情はすべて呑み込んでいる口調で、念を押すようにいった。少年は、大きなふところの中へ包み込まれる気がした。

なるほど「先生」は、「旦那さん」のいう通り、「なんでも出来んことのない偉い芸

術家」なんだろう。こんなたより甲斐のある人に、またとめぐり逢うことはできまい。わしはどこまでも、この先生について行こう。少年はそう感じた。額はやや狭かったが、顔の造作がみな大きく、ことに異様なほどたっぷりした耳と、柔かそうでいて厚く盛り上った手の、「先生」を見上げながら。

後年ふり返ってみると、そのときそう感じたことが、彼の一生を決定した。彼は自らの人生、あるいは運命を、「先生」にいわれた通り「全部任し」たのだった。

少年は武山一太、明治四十年生(うまれ)の十四。

彼はその前々日、「大雅堂美術店」を訪ねようと、新橋駅から「メゾン鴻乃巣(こうのす)」の看板を目印に歩いて来た。昭和五十九年現在は、地下鉄京橋駅を上ったところの、千代田生命ビルのあるあたりである。看板を見上げて立ち止り、ちょうど出て来たエプロン姿の女給が、すぐ斜め向いの横丁にある「大雅堂美術店」を教えてくれた。

「書画骨董鑑定所」と大きな墨書の看板も下った、角店だった。

尋ねると、長身で柔和な顔の「旦那さん」、中村竹四郎がいた。「森さんから犬ころでももろたようなもんやな」と呟きながらも、これから店に住込むうえでの心得を、いろいろとやさしく教えてくれた。

ここの北大路魯山人という先生は、大変な偉い芸術家だ。たとえばお前が今目印にして来た「鴻乃巣」のあの看板だって、先生がたった一晩で彫ったものだが、そのお礼が大枚五百円だったのだ。先生の彫った看板は、東京にはまだそう多くはないが、京都にも近江の長浜にも、福井や山代温泉にも、何枚もある。この近くに実業之日本社という雑誌社があるが、その社名の看板も、『實業之日本』という雑誌の題号も、先生の字だ。

一太は、森先生からもいわれて来た「立派な字の看板」を見上げて、一種の感銘を受けた。それは、一辺が二尺五寸から三尺近くもありそうな楠（後できいてわかったのだが）の板三枚に「鴻」「乃」「巣」と彫って、三階建の建物の一階と二階の間あたりに、嵌め込んであった。

隷書と篆書とをまぜ合せたような書体で、遠慮も会釈もしないといった筆勢で荒彫りし、したたるような岩緑青を流し込んである。ふつう木彫りの看板は、彫字いっぱいに色をつけてあるのを、その看板は筆勢で字のかすれた個処は個処なりに、顔料をかませて濃淡をつけてあった。いかにも木彫の芸術作品という迫力をたたえ、あたりを払う風情があった。武山は、今もそう思う。

「メゾン鴻乃巣」の、魯山人の木彫看板を、鮮明に記憶しているような人は、今日もはやほとんどあるまい。武山は、森からも中村からもいわれ、自らも後年好んで字を彫ったほどだけに、少年ながら注意深く見ていたのだった。

その日、「旦那さん」はさらにつづけた。先生はしかもまた、書画骨董の大の眼利きで、絵が上手、料理がまたとび抜けて巧い。この美術店は、お午頃と夜とは、美食倶楽部といって会員制で一人前十円以上もする料理を出すクラブになる。お前はこれから、私のいうことをききながら、先生の手足になって、一生懸命はたらくんだ、云々。

「ひやあ、でえれえ（どえらい）」

と、少年は胸中に驚嘆しつづけた。もし郷里の日本原（にほんばる）で、今の話のどの一つを伝えるとしても、大法螺吹きか半きちがいといわれそうなことばかりだった。たとえば彼の郷里で学校へ通う子供たちが、大事に使うように親からきびしくいわれて買ってもらう鉛筆が、一本五厘。家庭で月に一度も買えば、子供ばかりか大人もはしゃぐ牛肉は、上等で百匁（約三百八十グラム）八十銭である。

一太はその日、鎌倉材木座の書生として住込んでいた森一兵の邸を、胸ふくらませ

て出て来た。

大雅堂美術店と美食倶楽部というのを、中村竹四郎といっしょにやっている北大路魯山人という才能ゆたかな面白い男がある。絵が好きで料理も好きなお前には、ちょうどお誂え向きだ。俺がよく話しておくから、あそこへ行け。

一太は、森にそういわれた。一太にも、森家での書生生活に将来があるとは思えなかった。そのうえ、三浦海岸に別居していた夫人が帰って来て、森の女出入りからヒステリーを起す。一太は嫌気がさして、早く自分の進路を見つけて出て行きたいと思っていた。

彼は、森の使で同じ鎌倉の扇ヶ谷の中村竹四郎方へ、幾度か行った。中村の奥さんがその度に五十銭玉を一つ駄賃にくれたのを、一太は五つ六つ大事にもっている。他に、田舎を出るときもって来た十三円五十銭の中の半分以上が残っている。信玄袋をかついで「森先生」の家を出てからも、ときどき蟇口にさわってみて、たいそう心強かった。

彼にとっては、大雅堂美術店も「旦那さん」も思ったよりはるかによかった。「先生」にめぐり逢えたのは、このうえもない幸せだと思えた。彼は、大雅堂美術店が大

震災で焼亡するまでの三年間、その印象が裏切られたと思ったことはない。

武山一太が、いわばもろもろの事情が洗い出されたあとの真実を知ったのは、その後やや歳月がたってからである。先生が自分に目をかけてくれたように見えたのには、ほしいと思っていたところへ使い易そうな小僧が舞い込んで来てよかった、という意味がかなりあった。その後も「一公」とか「武山」とかいって側近者扱いをしてくれたのは、そのときどき利用価値があると見られたかぎりでのことであった。

すこしでもその価値がなくなったと見たり、他の者の方がまさっていると見たときは、即座に代えられてしまう。武山は後年、刃物で斬りつけられるような言葉を浴びせられたり、無理難題を強いられたりしても、「先生」をはなれて行くようなことは、ついにできなかった。はなれて行こうと覚悟しても、「先生」のただ一言で打ち摧かれてしまった。

「だめなんです、いざとなると私はもう蛇に睨まれた蛙のようになってしまいました。怖ろしい魔力じみたものを、先生はただよわせて来ました」

昭和五十九年七十八の武山一太は、そう述懐する。彼は、十四から魯山人の終った昭和三十四年五十三のときまで先生の握った綱にあやつられて生きて来た、と思う。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com